

ハンドボールにおける2対2の突破阻止に関する動きのコツ

ー卓越した防御プレーヤーの語りを手がかりにー

関 堯祐 (202010496、ハンドボールコーチング論)

指導教員：山田 永子、會田 宏、藤本 元

キーワード： センターハーフ、ピボット、コツ、タイミング

【目的】

本研究では、卓越したディフェンスプレーヤーを対象にして、6-0 ディフェンスにおける2対2の突破阻止に関する動きのコツについて明らかにし、センターハーフ（以降CH）の指導に役立つ知見を実践現場に提供することを目的とする。

【方法】

対象者は玉川裕康選手である。調査方法は質問紙によるアンケート調査およびインタビュー調査が用いられた。アンケート調査の内容はコンディションについて、試合の状況（優勢/劣勢/均衡）について、対人分析についてであった。インタビュー調査の内容はスクリーンをかわす具体的な方法についてである。アンケート調査の回答では得られなかったスクリーンをかわすコツについて、実際の動きの中で説明をしてもらった。

【結果と考察】

(1) ピボット（以降、P）の狙いを予測する

玉川選手は「Pを把握できる時間は多くした方が守りやすいと思います。Pに触らずに出てしまうと、スクリーンにかかってしまうことがあります。準備が遅れてしまうため、極力Pは触っておきます。」と語っている。このことから、ディフェンスはPの位置や、スクリーンを仕掛けるなどの狙いを把握するためにPに触っておき、気づかれないタイミングでスクリーンを仕掛けられることを防いでいると考えられる。Pとの距離感については「自分とPの距離を少し取っておき、スクリーンが来るのと同時に前から被れるように、スペースを確保することを意識しています。」と語っており、距離を少し取っておくことで、Pがスクリーンを仕掛けてくる時間を作り、その間にスクリーンが来ていることの認識と、かわすための準備を行っており、Pの狙いを予測しやすくしていると考えられる。

(2) Pのタイミングをずらす

「スクリーンはPがバックプレーヤー（以降、BP）によるフェイントや、シュートなどの何らかのオフenseプレーとタイミングを合わせて行うため、そのタイミングを把握するようにしています。」や、「スクリーンプレーの分析をする際に最も重要視してい

るのは、スクリーンのタイミングです。」と語っていることから、2対2のスクリーンプレーの成功の鍵はスクリーンを仕掛けるタイミングであり、タイミングをずらすことが突破阻止のコツであると考えられる。タイミングをずらすためには「Pの位置を把握しておいて、出る瞬間に押す」や「隣のディフェンダーにPがスクリーンを仕掛ける時には、スクリーンをかわしやすいように、Pを押してあげます」と語っていることから、Pを押して相手BPとPのタイミングをずらすことが重要だと考えられる。

(3) スクリーンのかかし方

「前に被る方法が良いと考えます。利点としてディフェンダー1人でBPとPの2人を同時にマークできる時間が一瞬作れる」と語っていることから、ディフェンスにとって有利な状況を作りだそうとする志向があることが示唆される。ディフェンスが有利な状況とは、センターバック（以降、CB）およびPの両方をコントロールしながらシュートやアシストを防ぐことができている状況だと考えられる。加えて「右CHの時に左側にスクリーンが来た場合、左足→右足の順に動かします。スクリーンが来た時に右足から動かすと距離が遠いので、カットしに行く前に左足を1歩かわします。」と語っている。このことから、1歩かわしてからPに被ることで、深い位置へのパスをカットすることができると考えられる。

(4) スクリーンにかかった際の対処

「パスする回数が多ければミスする確率も上がるためパスを多くさせたいという願望があります。」や、「CBに『ボン』と出たらPが空いて確率の高いシュートを打たれてしまうため、本来であれば相手シューターに対して流しをとるけど、引っ張りに立つ方に変える」と語っている。このことから、相手のパス回数を増やし、ミスさせる回数を増やすこと、1対2の中で相手と駆け引きをしていることが考えられる。

【結論】

2対2の突破阻止のコツとして、①Pの狙いを予測すること、②Pのタイミングをずらすこと、③スクリーンのかかし方、④スクリーンにかかった際の対処、の4点が明らかになった。